

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】奥村 京子 (オクムラ キョウコ)

【所属】(助成決定時) 大阪大学大学院文学研究科・博士後期課程

【研究題目】 ジェルジ・リゲティ作品に見る異文化表象の痕跡
— 3冊の手帳に綴じられた直筆資料の分析作業を通して —

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、ルーマニア出身の現代作曲家ジェルジ・リゲティが、亡命後に触発された世界の民族音楽の全貌を明らかにし、彼がどのような世界音楽を 1980 年代以降の諸作品に表象したのかを検証することである。本研究は、亡命芸術家による異文化接触、異文化表象のありかたを明らかにすることによって、20 世紀芸術に新しい光を当てるものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

パウル・ザッハー財団(スイス)が所有するリゲティの「3 冊の手帳」(以下、「プロジェクト・ノート」)に綴じられた 244 点の一次資料を総合的に分析・検討することによって、20 世紀という激動の時代に翻弄されつつも生き抜き芸術を創造し続けたリゲティの作品群に、どのような異文化が表象されているのかを検証した。

プロジェクト・ノートは、1980 年代初頭から 2000 年までの間に書き留められたと推定される。そこには、その時期に作曲された作品群や未発表の作品群、複数の未完のオペラ計画について書き留められていた。さらに、1980 年代以降のリゲティの創作史の根底に、世界の多種多様な民族音楽に対するリゲティの熱い眼差しがあったということが明らかになった。

プロジェクト・ノートに綴じられた一次資料 244 点はそれぞれ、1 冊目は 1980~1990 年に 22 点、2 冊目は 1990~1995 年に 70 点、3 冊目は 1995~2000 年に 152 点、書き留められたと推定される。まず、私は、それらの資料を、(A)複数の未完のオペラ計画、(B)世界音楽の探求、(C)1980 年代以降に発表された作品群、(D)1980 年代以降に考案された未発表の作品群、の 4 つのカテゴリーに分類・整理し、全一次資料の番号付けを行った。今回の調査では、(A)~(D)の資料群中、(B)世界音楽の探求に焦点を絞り、分析作業を進めた。

【結論・考察】(400字程度)

リゲティは、アフリカに根強く残る自然崇拝や呪術信仰に伴う儀礼、仮面舞踊、打楽器音楽、ポリリズム、非均整なリズム構造、狩猟採集民族ピグミーの複雑な声楽ポリフォニーに興味を持ち、アフリカ音楽研究の第一人者であるシムハ・アロムの講義を受講して、熱心にアイデアを書き留めていた。

また、リゲティは、タイの山岳民族の冠婚葬祭に伴う儀礼音楽や、グルジアの多声合唱音楽やクリマンチュリ、ミャンマーの複雑なヘテロフォニー、インドネシア・バリ島のガムラン音楽やケチャ、影絵

芝居などに興味を持ち、調査して得た知見を、自身の音楽にいかにして取り入れるかを考案していた。さらに、彼は、ロックやテクノ、レゲエ、サルサ、ルンバなどの大衆音楽についても書き留めていた。

リゲティの興味は、アフリカとアジアの音楽に特に集中していた。アフリカと一口に言っても、北・西・中央・東・南アフリカに、マダガスカル島などの島嶼も加えた地域の音楽文化について、彼は、様々な知見を書き留めており、アジアにおいても、彼は、東・東南・北・南・中央・西アジアの多種多様な民族音楽や民族楽器、伝統芸能などに興味を持ち、アイデアを書き留めていた。

世界音楽の探求に関する一次資料の分析作業が進むにつれて、そこに書かれていた多数のアイデアが、1980年代以降に発表された作品群と通じ合っていることが明らかになった。具体的には、晩年の大作《ピアノ・エチュード》(1985-2001)は、複雑なリズム構造を呈したピアノ曲が多いが、アフリカ音楽のポリリズムや非均整な拍節構造、ピグミーの声楽ポリフォニーなどを、リゲティが洗練させて自身の作品に取り込んだ痕跡が見出せる。また、《ハンブルク協奏曲》(1998-1999)は、自然倍音や特殊な調律・音階が用いられた作品であるが、リゲティが多種多様な世界楽器の探求から得た知見を実践した実験的な作品であることが分かる。

本研究によって、20-21世紀という激動の時代において、民族的・社会的・文化的に異なる背景に翻弄されつつも生き抜き変容し続けたリゲティの新たな足跡を示すことが出来た。